

タイにおける観光産業の概況(その3)
 ~コロナ禍の影響と現在の状況について~
 一般調査報告書

観光大国であるがゆえに、新型コロナウイルス感染症による人の往来制限の影響を大きく受けたタイですが、制限と緩和を繰り返し、2021年11月にワクチン接種完了者に対して隔離なし入国を認める“Test & Go”が開始されて以降は、ほぼ一貫して外国人観光客の増加が続いています。特に最新の統計によると、2023年2月の外国人観光客数は211万人となり、これまでで最大であった2019年12月の約395万人の50%以上にまで回復しました。ポストコロナを見据えタイ全体に活気が戻りつつある中、観光産業の目線からタイの現状をお伝えします。

1 コロナ禍によるタイの観光産業への影響

タイは世界有数の観光大国です。世界観光機関が公開しているコロナ禍直前の2019年のデータによると、タイの国際観光客到着数は約4,000万人で世界第8位、国際観光収入は約610億米ドルで世界第4位となっています。また、前年からの伸び率もそれぞれ+4%、+3%であり、成長産業であることが分かります(図1、2)。

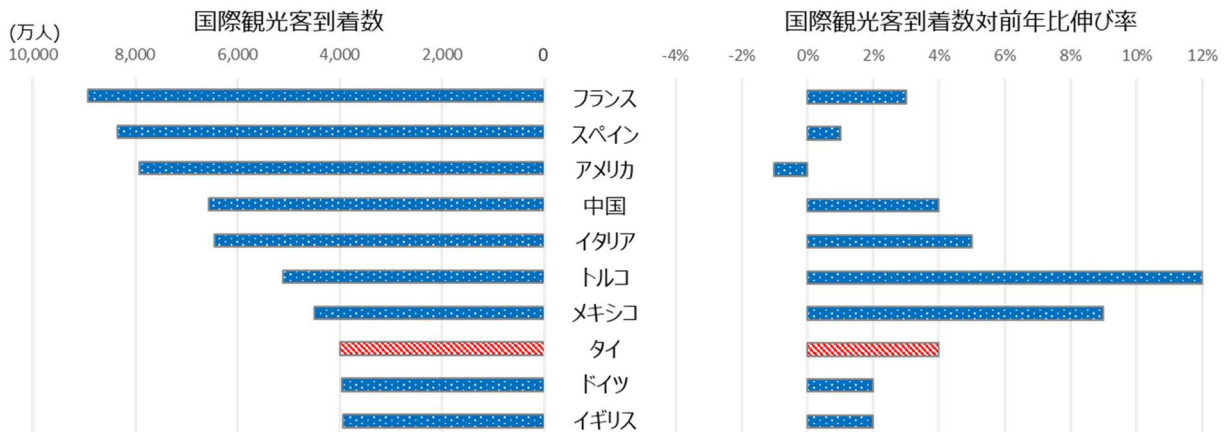


図1 2019年国際観光客到着数上位10か国・地域
 (出所: International Tourism Highlight, 2020 Edition (世界観光機関) から作成)

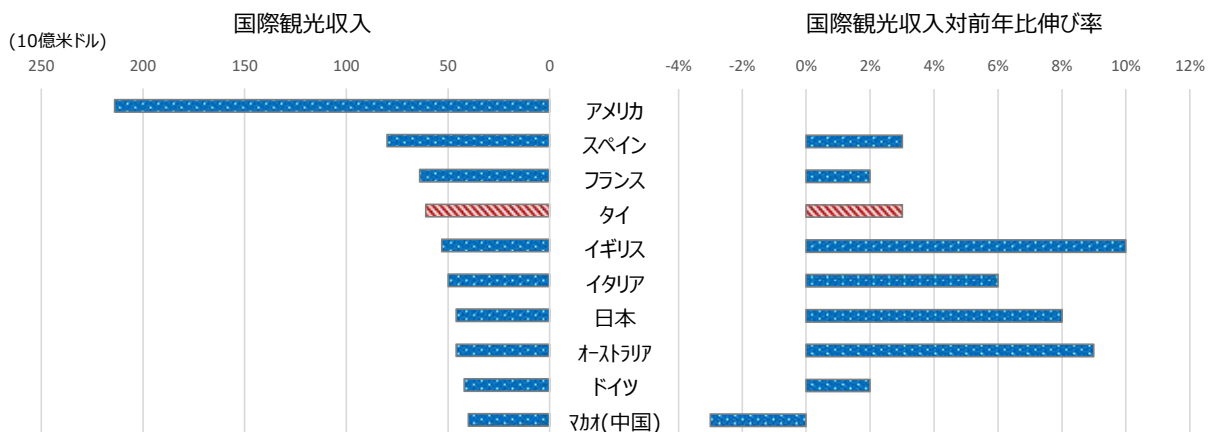


図2 2019年国際観光収入上位10か国・地域
 (出所: International Tourism Highlight, 2020 Edition (世界観光機関) から作成)

2020年7月1日の一般調査報告書でもご紹介したとおり、タイは観光という視点で分類すると4つの地方(中央部、南部、北部、東北部)に分かれており、それぞれがもつ観光資源も異なっています。チェンマイなどの古都がある北部とクメール遺跡を数多く有する東北部と比べ、ASEAN 経済の中心であるバンコク、世界遺産アユタヤや都市近郊ビーチリゾートであるパタヤなどがある中央部、プーケットに代表されるビーチリゾートがある南部は外国人観光客の割合が多いという点は、直感的にも納得できるのではないのでしょうか(図3)。

地理的に近く、ビーチリゾートを始めとするタイ各地への直行便が複数路線あるという利便性の高さも手伝い、ヨーロッパからの観光客の中でもロシア人観光客が非常に多いという点も興味深いです(表1)。余談ですが、こうしたロシア人観光客が多いことを背景に、2022年3月には、ロシアによるウクライナ侵攻等の影響により一時タイへの直行便が運休したことやクレジットカードの決済停止措置によって、ロシア人観光客が本国に帰れず、プーケット等に立ち往生してしまったという報道も記憶に新しいかと思います。

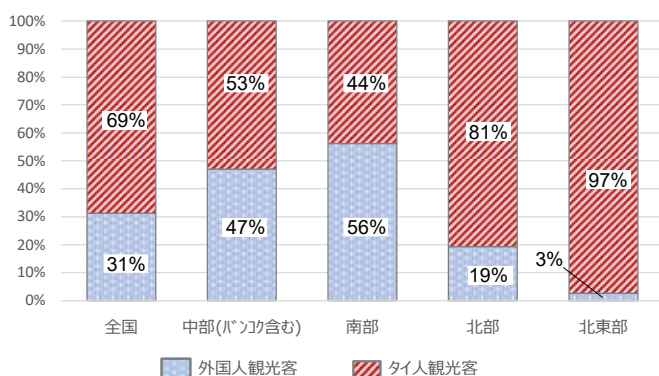


図3 2019年地方別外国人観光客とタイ人観光客の割合
(出所:タイ政府 観光・スポーツ省公表データから作成)

主な国及び地域	観光客数 (人)	主な国及び地域	観光客数 (人)
東アジア	27,669,963	南アジア	2,356,977
中国	11,138,658	インド	1,961,069
ASEAN	10,876,922	南北アメリカ	1,559,800
日本	1,787,185	米国	1,136,210
ヨーロッパ	6,531,220	オセアニア	874,154
ロシア	1,481,837	オーストラリア	771,798
英国	946,774	中東	727,318
ドイツ	836,926	アフリカ	196,819
		合計	39,916,251

表1 2019年国・地域別外国人観光客数
(出所:タイ政府 観光・スポーツ省公表データから作成)

このように世界中から観光客を集めていたタイですが、それゆえに新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大による人の往来制限が始まると、瞬く間に影響が出始めました。これまで年間4,000万人に迫る勢いであった外国人観光客は2020年には670万人、2021年には43万人にまで減少しました(図4)。また、GDPとGDPに占める観光客からの収入の割合の推移をみると、GDPはそれほど減少していない一方、GDPに占める観光客からの収入の割合は2019年には約16.2%だったところが、2020年には約5.1%、2021年にはわずか約1.5%まで激減しています(図5)。2019年と2021年のGDPを比較すると約4.3%の減少に留まっていることから、いかに観光産業へのダメージが大きかったかが窺えます。

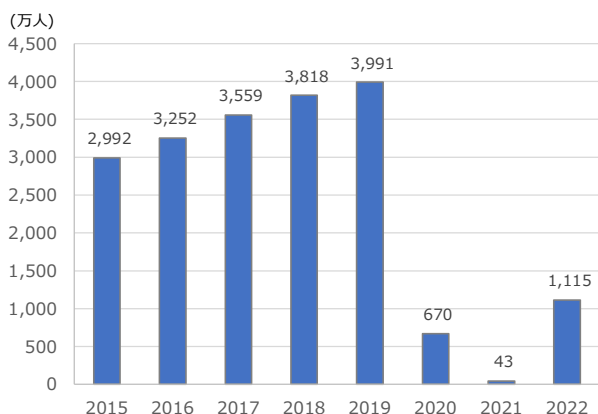


図4 外国人観光客の推移
(出所:タイ政府 観光・スポーツ省公表データから作成)

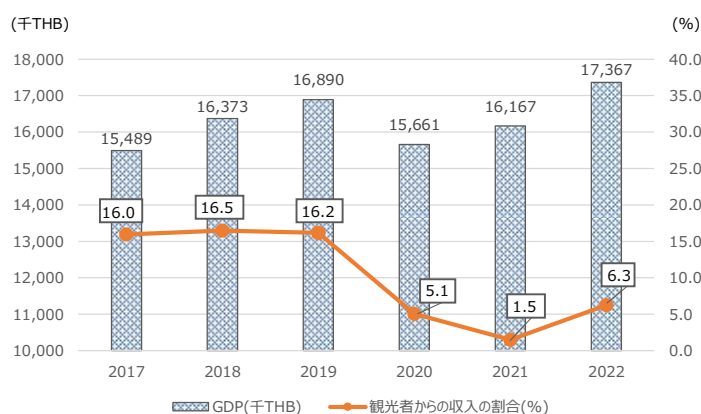


図5 GDPとGDPに占める観光客からの収入の割合の推移
(出所:タイ政府 観光・スポーツ省公表データから作成)

2 タイにおけるこれまでの活動・入国規制及び緩和政策

2020年3月26日に外国人の入国が原則禁止となって以来、タイ政府は活動制限と緩和を繰り返してきました(表2)。外国人観光客数の動きと合わせて見ると、2021年7月にプーケットでの“サンドボックス制度”が開始されてから少しずつその数が戻り始め、その後2021年11月にワクチン接種完了者に対する隔離なし入国を認める“Test & Go”が開始されて以降は、ほぼ一貫して増加が続いています(図6)。

今年1月の緩和をもって、ワクチン接種の有無にかかわらず入国できるようになり、外国人観光客の入国については現時点ではほぼコロナ前と同様の状態になったといってもよいでしょう。ただし、今後の感染者数の動向等によっては再度制度が変わる可能性もあるため、引き続き注視していく必要があります。

①【制限】2020年3月25日(3月26日から適用)
・非常事態宣言の発表、特定時間帯における外出の禁止 ・外国人のタイへの入国を原則禁止(労働許可を有する者など一部例外あり) 等
②【緩和】2020年5月
・レストランやショッピングモール等の営業再開 等
③【緩和】2020年6月29日(7月1日から適用)
・外国人のタイへの入国原則禁止を一部緩和(労働許可を有する者の家族など)
④【制限】2021年1月3日(1月4日から適用)
・感染の危険がある建物や場所(最高管理区域内(レッドゾーンの学校等)の使用を禁止 ・県境をまたぐ移動の自粛・延期を要請 等
⑤【緩和】2021年2月22日
・これまでレッドゾーンとされていたバンコク含む8都県を管理区域(オレンジゾーン)に緩和(飲食店は午後11時まで営業可(店内でのアルコール消費も可)等) 等
⑥【制限】2021年4月16日(4月18日から適用)
・バンコク都を含む18都県をレッドゾーンに指定(レストランなどでの店内飲食は午後9時までに短縮等) ・全ての学校および教育施設の建物などの使用を禁止 等
⑦【緩和】2021年6月22日(7月1日から適用)
・外国人観光客を隔離なしで受け入れる「サンドボックス」制度を創設(プーケット)
⑧【制限】2021年7月10日(7月12日から適用)
・バンコク都を含む10都県を最高厳格管理区域(ダークレッドゾーン)に指定 ・ダークレッドゾーンの居住者への夜間外出の禁止 等
⑨【制限】2021年7月17日(7月20日から適用)
・バンコク都を含む13都県をダークレッドゾーンに指定 ・ダークレッドゾーンの居住者への不要不急の外出の自粛要請 等
⑩【緩和】2021年10月29日(11月1日から適用)
・タイランドパス制度(ワクチン接種者に対する隔離期間なしでの入国が可になるTest & Go制度等)の導入 ・管理区域の見直し(ダークレッドゾーンを23県から7県に、レストラン等は午後11時まで営業時間延長を許可) 等
⑪【制限】2021年12月21日
・Test & Go やサンドボックス制度の一時停止
⑫【緩和】2022年1月27日(2月1日から適用)
・Test & Go の再開
⑬【緩和】2022年3月30日(4月1日から適用)
・入国前のPCR検査による陰性証明書を不要とする 等
⑭【緩和】2022年6月23日(7月1日から適用)
・タイランドパス制度の廃止
⑮【緩和】2022年9月23日(9月30日に解除)
・非常事態宣言の解除
⑯【緩和】2023年1月9日(1月10日から適用)
・新型コロナウイルスワクチン接種証明書なしでの入国が可能に ・中国やインドなど入国時にPCR検査が求められる国からの入国者へは保険加入を求める

表2 タイにおける新型コロナウイルス感染症による活動制限及び緩和の主な変遷

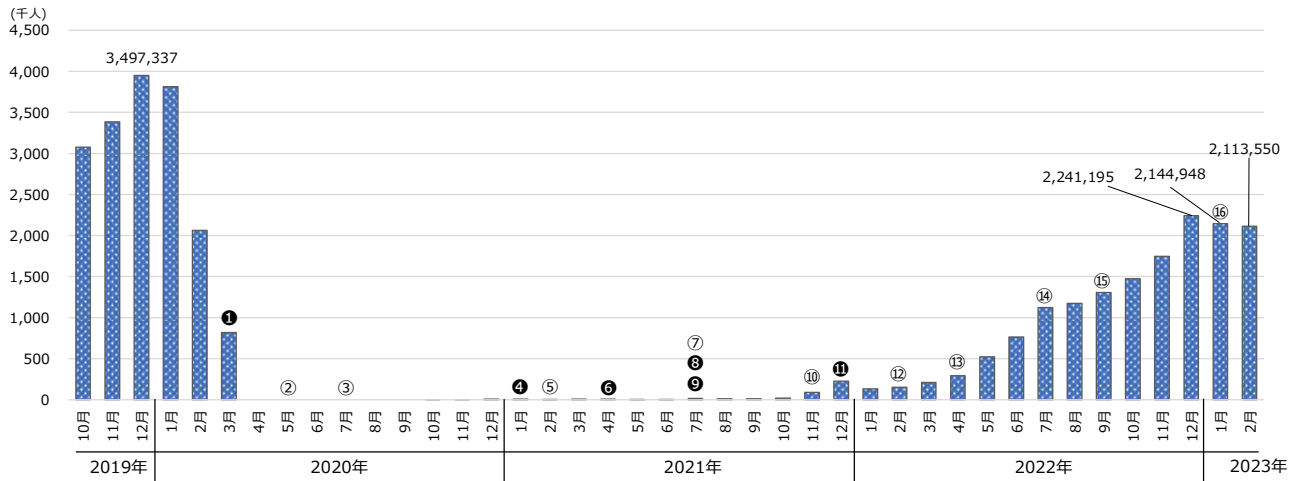


図6 外国人観光客の推移 ※丸囲み数字は前ページの丸囲み数字と一致(黒丸囲み数字は制限措置)
(出所:タイ政府 観光・スポーツ省公表データから作成)

3 タイにおける今後の観光産業の見通し及び課題

(1) 外国人観光客数の今後の見通し

図4でも示したとおり、最新の統計によると2022年の外国人観光客数は1,100万人を超え、コロナ前にはまだまだ及びませんが、明らかに回復の傾向が見て取れます。さらに、2023年の外国人来訪者数について、タイ観光評議会(TCT)は当初約2,000万人としていたところを2,500万人に、TMBタナチャート銀行経済分析センターは当初2,250万人としていたところを2,950万人に、タイ中央銀行は2,550万人としていたところを2,800万人に上方修正していることから分かります。各関係機関とも今後のタイのインバウンド観光に対してポジティブな態度を示しています。また、タイ政府観光庁(TAT)は、2023年の外国人観光客数の目標を2,500万人としています。2023年1月の外国人観光客数は約214万人、2月は約211万人となっていることから、このままの傾向が続けばこの目標も達成されるかもしれません。

図7は当事務所のスタッフが撮影したバンコク都内のある観光スポットの写真です。ここはバンコクでも屈指のパワースポットといわれるヒンドゥー教の祠である「プラ・プロム(エラワン廟)」で、年間を通じて国内外からの参拝者で賑わう場所となっていますが、コロナ禍では訪れる人はほとんどおらず閑散としていました(図7左)。一方、2023年3月下旬に同じ場所から撮影した写真(図7右)では、コロナ禍前と同程度の参拝者でごった返しています。この写真を見るだけでも、コロナ禍からの回復を強く感じていただけたと思います。

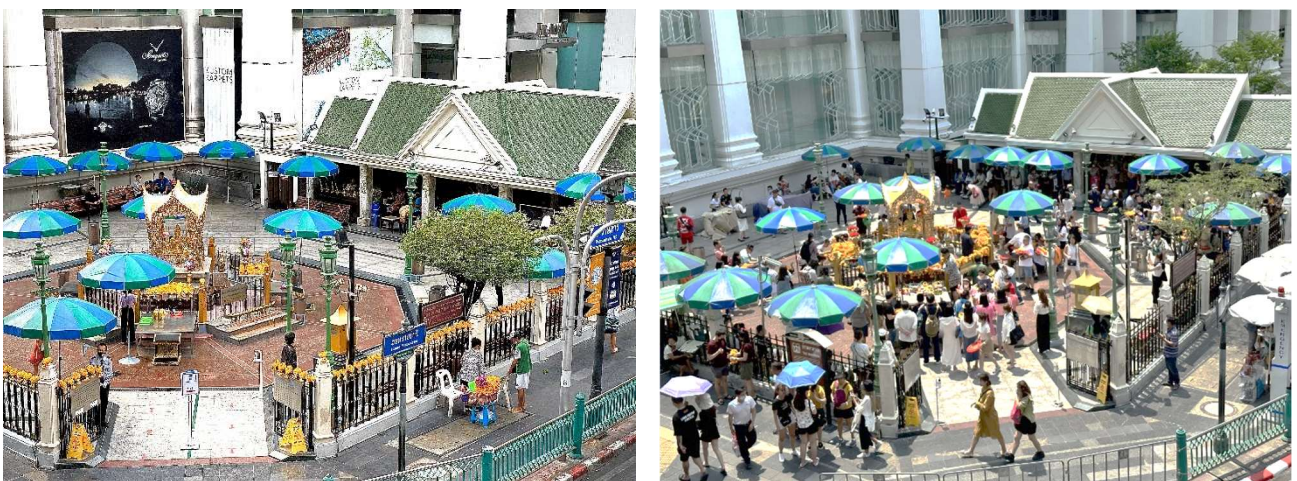


図7 プラ・プロム(エラワン廟)の様子(左:2021年3月下旬スタッフ撮影 右:2023年3月下旬筆者撮影)

(2) 中国人観光客の動向

さらに、タイにとってこれまで外国人観光客の中でも最も多かった中国人観光客の獲得に向け、TAT は 2 月に観光に関するセミナーや商談会を行う「Amazing Thailand Amazing New Chapters Road Show to China 2023」を中国・上海で開催しました。観光・スポーツ省のピパット・ラッチャキットプラカーン大臣とともに、タイのホテルなどを始め 61 社 100 名がこのイベントにするために上海を訪れるという力の入れ方で、タイの中国人観光客獲得に対する並々ならぬ思いを感じます。加えて、この場で TAT は中国の China Tourism Group Travel Services Co., Ltd. と、中国人観光客を増加させるために観光に関して連携することを盛り込んだ LOI (Letter of Intent: 基本合意書) を取り交わしました。最新の 2023 年 2 月の中国人観光客数は、2023 年 1 月から約 67% 増加の約 15.6 万人で、最も多いマレーシアの約 30.5 万人と比べると約 50% 程度ですが、こうした動きによって今後さらに中国人観光客は増加すると見られています (図 8)。

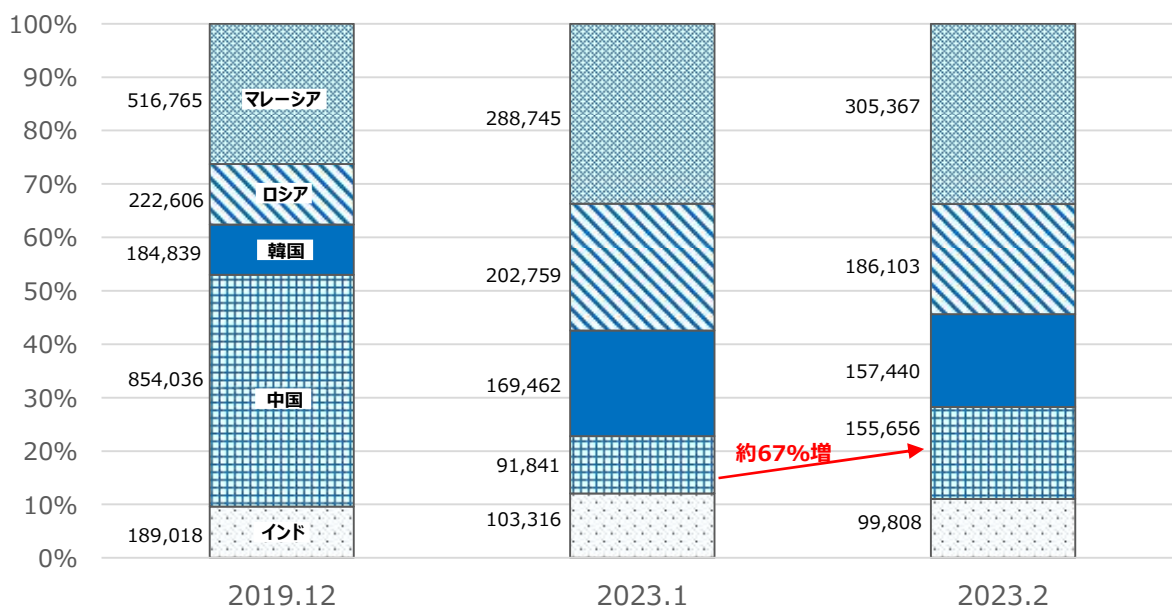


図 8 外国人観光客数の比較 (上位 5 か国におけるシェア)

(出所:タイ政府 観光・スポーツ省公表データから作成)

なお、タイ大手のカシコン銀行傘下のシンクタンクであるカシコン・リサーチセンターは、2022 年 12 月には 2023 年の中国人観光客数が 2022 年の 3-4 倍又は 100 万人以上となると予測していましたが、中国人観光客の海外旅行解禁を受け、2023 年 1 月にはその予測を 2019 年の約 42% 又は 465 万人に達すると上方修正しています。さらに、TAT も 2023 年 3 月にこれまで 2023 年の中国人観光客数を 500 万人と予測していたところを上方修正し、600~700 万人とする見通しを発表しました。こうした発表が次々となることからも、今後の中国人観光客の増加はタイ国内において現実感をもって受け入れられていると思われます。

(3) タイ人観光客の動向

一方、タイ人のタイ国内旅行の状況はどうでしょうか。

図 9 はタイ国内におけるタイ人及び外国人の国内訪問者数の推移です。国内訪問者数とは、旅行その他の移動も含め、自宅のある県から他の県へ移動した際に 1 カウントとするいわゆる延べ数であるため、1 人で複数回カウントされている点にご注意ください。こちらの図を見ると、タイ人の国内訪問者数はロックダウンの度に減少していますが、2021 年 11 月 1 日から適用された緩和措置 (前々ページの⑩の措置) 以降、急激に増加しており、現在においてはコロナ前とほぼ同水準まで回復していることが分かります。

なお、日本でいうと「Go To Travel」キャンペーンや「全国旅行支援」などが代表的ですが、タイでも同じような国

内観光客向けの制度を実施しています。例えば、「TRAVEL TOGETHER フェーズ 5」や「365 日ワンダータイランド」などが挙げられます(図 10)。特に前者については3月7日から4月26日までが募集期間であったところ、募集開始からわずか4日間で応募上限である56万人に達してしまったという人気ぶりでした。こうしたことから、タイ人のタイ国内旅行に対する旺盛な意欲が窺えます。

補足として、図 11 のタイ人及び外国人からの観光収入の推移も確認しておきましょう。外国人の国内訪問者数はコロナ禍前後を問わずタイ人よりも非常に少ないですが、観光収入についてはコロナ禍前及び直近4か月はタイ人国内訪問者数の金額を上回っています。グラフは割愛しますが、一人当たりの外国人観光客からの観光収入はタイ人からの観光収入のおよそ4~7倍で、この数字からもタイの経済にとって外国人観光客がどれほど重要かということが分かります。

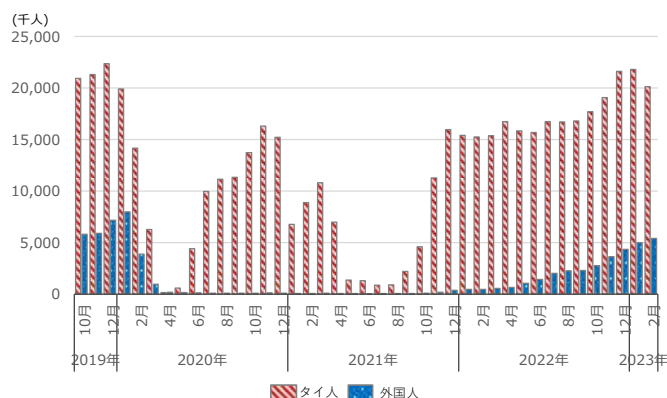


図 9 タイ人及び外国人の国内訪問者数の推移
(出所:タイ政府 観光・スポーツ省公表データから作成)

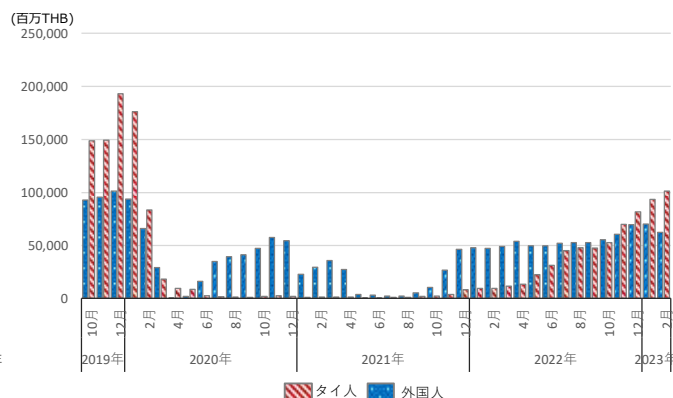


図 11 タイ人及び外国人の観光収入の推移
(出所:タイ政府 観光・スポーツ省公表データから作成)

【TRAVEL TOGETHERフェーズ5】

- ・一泊当たりの宿泊代の40%を補助 (3千THB以下、最大5部屋/泊)
- ・キャンペーン参加店で利用可能なクーポンを配付 (600THB/日)
- ・申請期間: 2023年3月7日~4月26日
(3月10日時点で応募上限である56万参加人数に達し、受付終了)
- ・対象期間: 2023年3月7日~4月30日

【365ワンダータイランド】

- ・プロモーション動画を投稿し、最も条件に合致した動画を投稿した参加者宿泊券や記念品の抽選権を得られる
- ・ECプラットフォームのLAZADAでプロモーションパッケージを販売
- ・3人で6週間以内でタイ5県を旅行し、コンテンツを作って投稿、投票を行い最も得票数が多かったコンテンツに賞金365,365THBを進呈

図 10 タイ国内観光客向け制度の概要

また、タイ国内の観光に関する直近のトピックとして、2023年4月にはタイの旧正月を祝う祭りである「ソンクラーン」の、4年ぶりの開催が挙げられます。このソンクラーンは、元々は仏像や仏塔、年長者の手に水をかけてお清めをするという伝統行事でしたが、近年はそれが転じて、街で通行人同士が水をかけ合って楽しむ水かけ祭りとして知られるようになり、世界中からこのお祭りを目当てに多くの観光客が訪れるようになりました。

2023年3月26日にはタイのプラユット首相が政府の関係機関に対し、ソンクラーンを盛大に祝う準備を行うよう指示を行ったことから、タイ政府としてもソンクラーン開催をタイ観光産業活性化の起爆剤としたい思惑があるようです。

(4)タイの観光産業における課題

外国人観光客数も増え、タイ国内の旅行需要も復活しつつあるという、まさに順風満帆といえるタイの観光産業ですが、一方で以下のような課題もあります。

①タイ全体に観光産業の回復の恩恵が行き渡っていない

外国人観光客はバンコク、プーケットなどの主要観光地を目的地としており、宿泊施設も4つ星や5つ星のホテルに集中しているため、北部や東北部などの観光地や小規模な宿泊施設の回復速度が鈍くなっています。

②観光客の支出額が少ない

外国人観光客の数自体は回復傾向にあります。長期滞在よりも短期滞在が多く、そのため宿泊日数や一人当たりの支出額がコロナ禍前よりも低い水準にあります。国内観光客についても同様の傾向が見られます。

③フライト便数の不足

コロナ禍において長期間使用していなかった航空機は、十分なメンテナンスを行った上で使用する必要がありますが、タイ国内にメンテナンスセンターが1か所しかない上、部品も不足しています。そのため、メンテナンスに通常よりも時間がかかり、フライト便数が思うように増やせない状況にあるようです。また、フライト便数が増やせないもう一つの理由として、航空会社の財務状況がコロナ禍により悪化していることから、新たな航空機のリースに踏み出せないという理由も挙げられます。

④その他

この他にも、食料品や光熱水費等の高騰によるホテル等の運営コストの増大や、労働者がより賃金の高い大手ホテルでの勤務を好むことに起因する小規模ホテルでの従業員不足等の問題も徐々に顕在化してきています。

このように、タイ観光産業を取り巻く環境としてはポジティブなニュースもあるものの、コロナ前に状態にまで回復するには今しばらく時間がかかりそうな状況にあります。しかしながら、これらの課題は徐々に解決されていく見通しであるとともに、タイ政府の様々な施策や、外国人観光客のタイへの回帰が徐々に表れてきている統計データから鑑みるに、タイの観光産業の未来は決して暗いものではないと考えられます。今後とも統計データやタイ政府の施策等を注視し、本報告書でも取り上げていきたいと思えます。

4 あとがき

この3月で愛知県バンコク産業情報センターの駐在員が交代となり、3月12日にセントレアからバンコクへ赴任しました。コロナ禍となって以来、セントレアの空港ロビーは閑散としていましたが、私が赴任するタイミングでは多くの人々が各航空会社のチェックインカウンターに列をなしており、いよいよ海外との往来も復調の兆しが見えてきたな、と肌で感じることができ、興奮したことを覚えています。また、セントレアの外貨両替所で並んでいる際には、私の前に並んでいる日本人4~5人が日本円からタイバーツへの両替を行っているのを目の当たりにし、日本からタイへの観光客が増加してきていることへの嬉しさを感じました。

本文中にも記載したとおり、現在はバンコクの街中や飲食店、ショッピングモールに徐々に外国人が増えてきており、観光大国タイの回復の動きをこの目で見る事ができています。今後、コロナ禍が終息していくに従い、タイが更に活気を取り戻していく様子を、最前線からお伝えできればと思います。

本資料は、参考資料として情報提供を目的に作成したものです。

バンコク産業情報センターは資料作成にはできる限り正確に記載するよう努力しておりますが、その正確性を保証するものではありません。

本情報の採否は読者の判断で行ってください。

また、万一不利益を被る事態が生じても当センター及び愛知県等は責任を負うことができませんのでご了承ください。